

# 『天演論』と『勸学篇』の関連性から見た 嚴復の政治思想

——二段階的発展及び各段階の政治モデル——

宋 曉煜

要旨：本稿の目的は、嚴復がほぼ同時期に翻訳した『天演論』と『勸学篇』の関連性とその意義を明らかにすることである。訳書を原著と対照し、とりわけ嚴復による訳文の加筆と削除、語彙の使用法などに注目することにより、『天演論』と『勸学篇』に嚴復の類似した主張を読み取った。さらに共通点の分析を経て、嚴復の政治思想に見られる矛盾は彼の二段階的発展説に起因することを突き止めた。

## はじめに

1897年11月24日、『国聞彙編』という旬報雑誌が天津で創刊され、嚴復(1853年～1921年)はその発起人の1人であった。『国聞彙編』の内容は、各冊の第一篇が西洋名著の翻訳からなり、この部類に属する文章は2つだけで、共に嚴復によるハクスリー著『進化と倫理』の翻訳『天演論』と、スペンサー著『社会学研究』の翻訳『斯賓塞爾勸学篇』(スペンサーの勸学篇)である。『国聞彙編』の廃刊時(1898年2月15日)には、共に未完であったが、1898年6月、完訳した『天演論』が単行本として公刊され、さらに、1903年になって、『社会学研究』の完訳が単行本として出されたとき、そのタイトルは当初の「斯賓塞爾勸学篇」から「群学肄言」に変更された(表1)。

表1 『天演論』と『斯賓塞爾勸学篇』の翻訳経緯

原著	著者	『国聞彙編』に 連載された翻訳	『国聞彙編』での連載時点	完訳
『進化と倫理』 ( <i>Evolution and Ethics</i> , 1894年)	ハクスリー (Thomas Henry Huxley, 1825年～1895年)	『天演論』 (原著のプロレゴメナI～VII節の翻訳)	第二冊 (1897年12月4日)	『天演論』 (1898年6月)
			第四冊 (1898年1月7日)	
			第五冊 (1898年2月5日)	
			第六冊 (1898年2月15日)	
『社会学研究』 ( <i>The Study of Sociology</i> , 1873年)	スペンサー (Herbert Spencer, 1820年～1903年)	『斯賓塞爾勸学篇』 (このタイトルは全書を指すが、この時点では第一章のみ翻訳されている。)	第一冊 (1897年11月24日)	『群学肄言』 (1903年)
			第三冊 (1897年12月28日)	
			第四冊 (1898年1月7日)	

『斯賓塞爾勸学篇』は今日あまり知られていないが、当時まったく影響力を持たなかったわけではない。姚純安の考察によれば、孫宝瑄(1874年～1924年)が日記で同書への強い興味を表したほか、章炳麟(1869年～1936年)が1898年に曾広詮とスペンサーの文章二篇を翻訳したきっかけは、『斯賓塞爾勸学篇』の未完を惜しんだからだという<sup>(1)</sup>。しかし、『斯賓塞爾勸学篇』についての先行研究は皆無に近いほど少なく、ほとんどはそのタイトルが言及される程度にとどまっている<sup>(2)</sup>。その一方、『天演論』はこれまでかなりよく研究されてきた<sup>(3)</sup>。『天演論』はほとんどの節が、訳

(1) 姚純安(2006)、44-45頁。

(2) 『斯賓塞爾勸学篇』を張之洞の『勸学篇』と比較する論文が見られる。張之洞の『勸学篇』は、1898年の旧暦の3月、即ち、『斯賓塞爾勸学篇』の連載が終わった直後に発表されたため、嚴復の主張に対する反駁だと指摘されている。郭道平(2015)を参照。

(3) 例えば、本稿が引用した先行研究のほか、以下のような嚴復に関する研究を参照した。

小野川秀美(1952)「清末の思想と進化論」『東方学報』21、1-36頁；鈴木修次(1981)『日本漢語と中国』中央公論社；佐藤慎一(1990)『『天演論』以前の進化論——清末知識人の歴史意識をめぐって』『思想』792、241-254頁；王中江(1991)『嚴復與福沢諭吉：中日啓蒙思想比較』開封：河南大学出版社；坂元ひろ子(1995)「中国民族主義の神話——進化論・人種観・博覧会事件」『思想』849、61-84頁；佐藤慎一(1996)『近代中国の知識人と文明』東京大学出版会；俞政(2003)『嚴復著訳研究』蘇州：蘇州大学出版社；呉丕(2005)『進化論與中国激進主義 1895-1924』北京：北京大学出版社；黄克武(2005)「走向翻譯之路：北洋水師学堂時期的嚴復」『中央研究院近代史研究所集刊』49、1-40頁；黄克武(2008)「新名詞之戰：清末嚴復訳語與和製漢語的競賽」『中央研究院近代史研究所集刊』62、1-42頁；沈国威(2008)「“一名之立、旬月踟躕”之前之後：嚴訳与新国語の呼喚」『東アジア文化交渉研究』1、311-335頁；蕭公權(2010)『中国政治思想史』北京：新星出版社；永田圭介(2011)『嚴復：富国強兵に挑んだ清末思想家』東方選書41、東方書店；趙稀方(2012)『翻譯現代性——晚清到五四的翻譯研究』天津：南開大学出版社；区建英(2013)『嚴復：国民の自由

文と案語（嚴復によるコメントや説明、計38カ所）からなっている。ハクスリーの原著ではスペンサーの名前が明確に言及されていないが、自序（嚴復による序言）、訳文の加筆部分、案語では、その名が計24回現れている。これまで、多くの先行研究はこの訳書を主に案語、ハクスリー及びスペンサーの思想、同書が中国読書界に与えた影響、嚴復が作った翻訳語、ないし『天演論』以前の進化論的思想などの角度から分析し、『天演論』におけるスペンサーの存在を重視し、嚴復の思想の独自性にも注目してきた。しかし、嚴復が加筆、削除、変更した部分、語彙の使用法などから嚴復の政治思想を読み取る作業はまだ十分とは言えず、『天演論』と『斯賓塞爾勸学篇』、あるいは『天演論』と『群学肄言』を比較して分析する研究は見当たらない。

嚴復の政治的関心は近代化の速度の問題をめぐっている。進化論的弱肉強食の時代は必然的に近代化の速度の問題をもたらした。この問題に直面して、進化論の紹介者である嚴復は、どのように進化論を受容し、どのようにその思想を中国人に伝えたのだろうか。また、彼は中国のためにどのような進路を選んだのだろうか。これらの問題を究明するには、嚴復の進化論受容の原点、即ち、訳書そのものを考察しなければならない。なぜなら、嚴復の翻訳は原著と相違するところが多く、そこに彼自身の政治思想を読み取ることができるはずだからである。

本稿はまず、『天演論』と『斯賓塞爾勸学篇』（以下、『勸学篇』と略す）の関連を明らかにし、『天演論』と『勸学篇』の比較研究の妥当性を呈示する。それから、とりわけ嚴復による訳文の加筆、削除、語彙の使用法などに注目しつつ、『天演論』と『勸学篇』の翻訳作業に見られる共通点を探り出し、嚴復の時局論文、先行研究などに照らしながら彼の政治思想を読み取ることにする。

---

を探し求めた非主流の思想家」超景達、原田敬一、村田雄二郎、安田常雄編『文明と伝統社会：19世紀中葉～日清戦争』講座東アジアの知識人、有志社、118-134頁；朱琳（2014）「梁啓超における中国史叙述：「専制」の進化と「政治」の基準（1）」『人文学研究所報』52、95-115頁；廖七一（2017）「嚴訳術語為何被日語訳名所取代？」『中国翻訳』4、26-32頁。

## I 『国聞彙編』に連載された『天演論』と『斯賓塞爾勸学篇』

1895年3月、嚴復は『原強』という時局論文の冒頭でダーウィンとスペンサーを紹介している。そこではダーウィンが『種の起源』(*On the Origin of Species*, 1859年)の第三章で言う「争自存」(Struggle for Existence、生存競争)に関して、次のように説明されている。「初めは、種族と種族が争う。群れになって国が成立した後は、群れと群れ、国と国が争うようになる。弱者は強者に食われ、愚か者は智者に使役される」<sup>(4)</sup>。しかし、ダーウィンはそこで国際競争には言及しておらず、生物学の範囲内で進化を論じているだけである。つまり、嚴復は生物進化論を読んで国際情勢を連想したのである。嚴復はダーウィンの次に、スペンサーを紹介し、自然科学に立脚して人間社会を分析するというスペンサーの研究方法を強調した。スペンサーの数多い著作の中から、嚴復は『社会学研究』を選んで具体的に説明し、その題名を『勸学篇』として、社会と国を生物有機体の体制になぞらえて説明する社会有機体説 (social organism) を高く評価したのである。

ダーウィンとスペンサーの説に関して、嚴復は次のように指摘している。「歲月は悠々と流れ、四隣は耽々と狙い、恐らく何もしないうちに、(中国は)すでにインドやポーランドのようになっている。スペンサーの説の通りに行わないうちに、ダーウィンの理論の通りに淘汰されてしまう。況やそれ(スペンサーの説)が必ずしも遂げられるとは限らないのである」<sup>(5)</sup>。ダーウィンの理論は嚴復に中国が置かれている国際情勢を連想させ、多大な緊迫感を与えた。淘汰を避けるためスペンサーの説を活用するには時間が必要であり、間に合わないかもしれないし、そもそも実現可能かどうかも分からない、と懸念したのである。つまり、この時点ですでに、嚴復はスペンサーの理論を重視し提唱し始めているものの、それが実際に中国で効果を奏するかどうかは自分自身にもわからなかった。このような理想と

---

(4) 嚴復 (1895年3月4日～9日)、5頁。原文：其始也，種与種争，及其成群成国，則群与群争，国与国争。而弱者当為強肉，愚者当為智役焉。

(5) 嚴復 (1895年3月4日～9日)、9頁。原文：而歲月悠悠，四隣耽耽，恐未及有為，而已為印度、波蘭之統；將錫彭塞之說未行，而達爾文之理先信，況乎其未必能遂然也。

現実をめぐる矛盾した心境が、後で分析するように、彼の訳文からも窺える<sup>(6)</sup>。

1897年の末、『天演論』と『勸学篇』がほぼ同時期に連載され始めたことは、注目に値する。『天演論』（『進化と倫理』）の著者であるハクスリーはダーウィンの友人であり、丘浅次郎は「進化論の普及上には最も功績の著しい人」と評価している<sup>(7)</sup>。換言すれば、2つの訳書は『原強』が言及したダーウィンとスペンサーの論の延長線にある。

とはいえ、『進化と倫理』は単に生物進化論を紹介する著書ではない。ハクスリーは1893年にオックスフォード大学で、『進化と倫理——ロマネス講演』（*Evolution and Ethics. The Romanes Lecture*）という題目で講演し、1894年6月、『進化と倫理——プロレゴメナ』（*Evolution and Ethics. Prolegomena*）<sup>(8)</sup>をその導入部として付加して1つの著作として完成した。そして同年、彼のほかの論文と合わせて合本として出版された。プロレゴメナの第I節は生物進化論を紹介しているが、そのほかの節は自然の状態（state of nature）と技芸の状態（state of art）を対立的に描き、園芸過程（the horticultural process）や植民地建設の過程（the process of colonisation）を技芸の状態の例として挙げている。庭の植物が繁茂して限界に達した場合、庭師は平気で不完全な植物や余分な植物を引き抜くが、植民地の人口がいったん限界に達した場合、人間の統治者は余剰人口の組織的な根絶や排除を行うことは困難である。したがって続くロマネス講演においては、宇宙過程（the cosmic process）に対抗するために、園芸過程の限界が語られ、社会の絆が強まる過程、即ち、倫理過程（the ethical process）という概念が導入され、強調されている。そして、自己抑制、仲間同士の助け合い、

(6) スペンサーの理論に関して、嚴復は『原強修訂稿』で、『勸学篇』は、読者に「群学」（社会科学）を学ばせる本である。「知恵」、「体力」、「徳行」の向上を要点とする」と述べている。これについては、本稿第II章第2節で具体的に紹介する。嚴復（1896年10月以後）、17頁を参照。『原強』は1895年3月4日から9日まで『直報』に連載された後、1896年10月、上海の『時務報』に転載の話が起きた。嚴復はそのためにこれを『原強修訂稿』として書き直したが、結局転載されなかった。そのため、『原強修訂稿』の正確な執筆時期は不明であるが、『嚴復集』は少なくとも1896年10月以後のことと推測している。

(7) 丘浅次郎（1940）、511頁。

(8) 『天演論』の連載版はProlegomenaを「懸疎」と訳したが、単行本として出版された時、嚴復はこれを「導言」とし、ロマネス講演の部分を「論」とした。赫胥黎（1897年12月4日～1898年2月15日 [2013]）嚴復訳、81頁を参照のこと。

共同体に対する責務を要求し、それによって最適者の生存ではなく、できる限り多くの人々を生き残らせるのである<sup>(9)</sup>。

ハクスリーが宇宙過程と倫理過程を対立的で二元論的な構造として示すのに対し、スペンサーはあらゆるものを進化の法則によって一元的に説明している<sup>(10)</sup>。山下重一によると、『天演論』の論十五の案語で、厳復はスペンサーの『倫理学原理』(*Principles of Ethics*, 1879年～1893年)の内容を少し要約しており、「自然の進化過程と人間社会の倫理的過程とを全面的に切り離そうとしたハクスリーに強く反対」している<sup>(11)</sup>。

しかし、『天演論』と同時期に連載されたのは『倫理学原理』の翻訳ではなく、『社会学研究』の翻訳である。厳復は進化と倫理との関係を詳細に比較分析するより、『社会学研究』に含まれた社会有機体説及び社会進化論そのものに興味を引かれたのだろう。同書の概要は、社会科学を科学として重視すべきであり、これを順調に発展させるためには、客観的及び主観的な障碍を乗り越え、偏見をなくし、他分野の基礎知識をあらかじめ学ぶべきだという主張である。ただし、『社会学研究』は「社会学」(sociology)及び「社会科学」(social science)という用語を並行して使っており、同書は「社会科学」をめぐって展開されていることに注意すべきである<sup>(12)</sup>。

『国聞彙編』に連載された『勸学篇』は『社会学研究』第一章の訳文であり、その概要は社会科学の必要性を証明することである<sup>(13)</sup>。同じく同誌に連載された『天演論』及び1898年6月に単行本として公刊された湖北沔陽慎始基齋版の完訳『天演論』は、戊戌政変(1898年9月21日)以前の翻訳であった。ところが、『社会学研究』の完訳、『群学肆言』は戊

---

(9) Thomas H. Huxley (1894) を参照。『進化と倫理』の日本語訳は、ジェームズ・バラデイス、ジョージ・C・ウィリアムズ (1995) 『進化と倫理：トマス・ハクスリーの進化思想』小林傳司、小川真里子、吉岡英二訳中のT・H・ハクスリー (1995) 『進化と倫理』小林傳司訳、86-183頁を使用した。

(10) 山下重一 (2000)、154-157頁を参照。

(11) 山下重一 (2001)、152-153頁を参照。

(12) 郭道平 (2015)、49頁を参照。

(13) 『社会学研究』の第一章の見出しは「OUR NEED OF IT」。『国聞彙編』の『勸学篇』には、この見出しは「論群学不可緩」と翻訳されている。つまり、『斯賓塞爾勸学篇』は『社会学研究』全書の書名の翻訳であり、「論群学不可緩」は『社会学研究』の第一章の見出しの翻訳である。黄克武は「勸学篇」が『社会学研究』の第一章の見出しの翻訳だと述べるが、それは間違いである。黄克武 (2013)、12-13頁を参照のこと。

戊戌政変以後の1903年に出版されており、『国聞彙編』の『勸学篇』をこの政変を経た数年後の『群学肄言』の第一章と比べてみると、用語法はかなり相違していることが分かる。また、戊戌政変の直後に嚴復が弾劾されたことを考えるならば、戊戌変法の失敗が彼の政治思想に新たな変化をもたらした可能性が高い。しかも、戊戌政変以降、検閲は厳しくなっており、例えば、『天演論』の『訳例言』に含まれていた維新派の指導者、梁啓超の名前が1898年12月の「嗜奇精舎本」という版からは削除されている<sup>(14)</sup>。したがって、戊戌政変以前の同時期の翻訳である『天演論』と『勸学篇』との関連性を探ることは、それ以降の嚴復の思想的変容を明らかにするためにも意味があるに違いない。

## II 理想的な政治モデル

### 1 イギリスへの憧れ

『進化と倫理』のプロレゴメナV、VI、VII、VIIIには、植民地建設についての記述が多く見られる。これを読むと、ハクスリーは植民地建設について何も疑問を感じていなかったように思われる。彼は入植者を「文明人」、先住民を「野蛮人」と呼んで、「彼ら（入植者、colonists）が怠惰で愚かで不注意な連中であれば、あるいは仲間うちのもめごとにエネルギーを浪費したりすれば、……そのときには土着の野蛮人（the native savage）が文明人である入植者（the immigrant civilized man）を滅ぼすだろうという<sup>(15)</sup>。入植者と先住民は敵対関係にあるが、植民地侵略は未開の地域に文明を広める行為として是認されると彼は考えている。したがって、立派に建設された植民地は「地上の楽園」（an earthly paradise）、「真のエデンの園」（a true garden of Eden）に譬えられるのである<sup>(16)</sup>。

イギリスの植民地建設を何の疑問もなく肯定するハクスリーの原文対

---

(14) 孫運祥（2003）、133-134頁を参照。

(15) T・H・ハクスリー（1995）小林傳司訳、99頁。Thomas H. Huxley (1894), p. 17. 原文：if they are slothful, stupid, and careless; or if they waste their energies in contests with one another, ... The native savage will destroy the immigrant civilized man; ...

(16) 原文：Thus the administrator might look to the establishment of an earthly paradise, a true garden of Eden. T・H・ハクスリー（1995）小林傳司訳、101頁；Thomas H. Huxley (1894), p. 19を参照。

し、厳復は『天演論』の訳文に植民地建設の理由を加えている(例1)<sup>(17)</sup>。

例1: 原文(『進化と倫理』): The process of colonization presents analogies to the formation of a garden which are highly instructive. Suppose a shipload of English colonists sent to form a settlement, in such a country as Tasmania was in the middle of the last century. (p. 16)

原文の意味: 植民地建設の過程は庭作りをアナロジーとすると非常にうまく説明できる。前世紀中葉に例えばタスマニアのような地域に植民地を作るために送り込まれた一群のイギリス人入植者のことを考えてみよう。 (98頁)

訳文(『天演論』): 天演之説, 若更以墾荒之事喻之, 其理将愈明而易見。今設英倫有数十百民, 以本国人満, 謀生之艱, 爰願前往新地開墾。満載一舟, 到澳洲南島達斯馬尼亞所。(導言七・善敗, 1337頁)

訳文の意味: 「天演」<sup>(18)</sup>の説に関しては、もし更に「墾荒」(荒地開墾)を以て喩えるならば、その理はますます明らかで、容易に見てとることができる。今たとえばイギリスでは数百の「民」が、自国の人口膨張によって生計を支えるのが困難であり、そのため、「新地開墾」を決め、船に乗ってオーストラリアの南の島であるタスマニアに到着したとする。

[注: 以降、本稿のすべての例文においては、一重下線は注意すべき部分、波下線は厳復による加筆である。]

例1のように、厳復は『天演論』導言七で the process of colonization (植民地建設の過程)を「墾荒」(荒地開墾)、form a settlement (植民地を作る)を「新地開墾」、colonists (入植者)を「民」と訳している。しかも、イ

(17) 本稿が引用するハクスリーの『進化と倫理』は、Thomas H. Huxley (1894)を参照。『進化と倫理』の日本語訳は、T・H・ハクスリー (1995) 小林傳司訳を使用し、必要に応じて、筆者による修正を加えた。本稿が引用する『天演論』は、赫胥黎 (1898 [1986]) 厳復訳を参照。また、『天演論』の訳文及び案語の筆者による日本語訳は、厳復 (1998) 馮君豪注訳を参照した。

(18) 黄克武の考察によれば、厳復が作った「天演」は evolution, evolutionary theory の翻訳語であり、厳復にとって、「天演」は宇宙と人事の変化、進歩と退歩、evolution と cosmic process の意味を含んでいるという。黄克武 (2014)、152頁、155-156頁、159頁を参照のこと。



ギリスの植民地獲得と入植を、嚴復の加筆は生きていくためのやむを得ない選択として呈示し、文明の名による植民地建設を正当化している。これについて、区建英は「嚴復は無言の抵抗として改訳」を行って入植に関わる言葉を削除したと分析している<sup>(19)</sup>。しかし、植民地建設を「新地開墾」や「墾荒」と訳すことは『天演論』に限られており、嚴復の同時期の時局論文、例えば、『擬上皇帝書』（1898年1月～2月）は、植民地を「属地」という言葉で表している<sup>(20)</sup>。しかも、『原強修訂稿』（1896年10月以後）には、植民地の人間が入植者に圧迫されている悲惨な状況も描かれており、実情を認識していなかったわけではない<sup>(21)</sup>。したがって、「無言の抵抗」というよりも、嚴復はむしろ『天演論』の中では意図的に植民地のマイナス面を隠蔽しようとしたのではないかと思われる。

他方、『天演論』の導言三の案語で、嚴復は、「土人」（先住民）が絶滅の危機に瀕している根本的な原因は殺されたからではなく、彼ら自身が生計の道を知らなかったからだと述べている<sup>(22)</sup>。この案語に対して、馮友蘭は「嚴復は植民地主義、即ち帝国主義国家が行う植民地侵略の理論的な根拠を作った」と厳しく批判した<sup>(23)</sup>。確かに、『天演論』の訳文と案語を読む限り、植民地侵略を正当化するような印象を与えるが、彼の同時期の時局論文は明確に植民地侵略に反対している。19世紀90年代の末期、日清戦争に敗れた中国の情勢はますます危うくなり、1897年11月、中国の膠州湾はドイツに占拠された。ドイツの強権的な行動に対して、イギリスの『タイムズ』が賛意を表明したというニュースを聞いた嚴復は、1897年11月24日に『駁英「太晤士報」論德拋膠澳事』という時局論文を発表し、『タイムズ』の態度を批判した。「所謂開化の民、開化の国というものは、権力を持っていても他者を圧迫することなく、力を持っていても他者のものを奪わないはずである」と彼は慨嘆している<sup>(24)</sup>。

(19) 区建英（2009）、136頁。

(20) 原文：蓋英之海權最大，而商利獨閎。其屬地大者有五，印度、南澳洲與北美之康納達、非洲之好望角。嚴復（1898年1月27日～2月4日）、69頁を参照。

(21) 嚴復（1896年10月以後）、23頁を参照。

(22) 赫胥黎（1898 [1986]）嚴復訳、1331頁を参照。

(23) 馮友蘭（1982）、96頁。

(24) 嚴復（1897年11月24日）、55頁。原文：夫所謂開化之民，開化之國，必其有權而不以侮人，有力而不以奪人。

『天演論』の導言三の連載時期は1898年1月7日、導言七は同年2月15日であるから、『駁英「太晤士報」論德拋胶澳事』が掲載されてから3か月も経っていない<sup>(25)</sup>。したがって、『天演論』と時局論文の立場はいかにも矛盾しており、彼が中国を標的とする植民地侵略には反対しながら、中国と無関係な植民地侵略を正当化しようとしたとは考えにくい。正義の信念に基づいて植民地侵略を批判するからには、中国に関係があるか否かに関わらず、植民地侵略行動それ自体に反対するはずだからである。したがって、案語で先住民が殺害されたことを曖昧にしたのは、弱いから淘汰されるという弱肉強食の論理を強調したかったからに違いない。この論理は中国の場合にも当てはまる。彼は1898年の『擬上皇帝書』で、中国がなぜここまで弱体化したのかに関して、その原因は七割が内治にあり、三割が外患にあると分析した<sup>(26)</sup>。つまり、侵略された根本的な原因は自分が弱いからだという事実を彼は強調したかったのである。

『天演論』の導言七の案語で、嚴復は「「墾荒」(the process of colonization) が順調に実施されたかどうかによって、民種の水準が判断できる」と指摘している<sup>(27)</sup>。植民地侵略を不正義と認識する以上、それを擁護するはずはないから、この指摘はむしろ帝国主義国家の脅威を強調するためであっただろう。イギリスは当時、世界で最も広大な植民地を経営し、そこから膨大な利益を得ていた。嚴復から見れば、世界の覇権を握ったイギリスは成功者であり、民種の水準が高い。つまり、嚴復が『天演論』で検討し、読者に訴えようとしたのは、植民が是か非かではなく、優れた民種を生み出しているイギリス政治の特質であり、そのために、否定的印象を与える植民及び植民地に関する表現を弱めようとしたのではないだろうか。

同様に、『勸学篇』の訳文でも、イギリス社会のマイナス面を控えめに訳している例が見られる。『社会学研究』中、自由放任主義を主張するス

---

(25) 赫胥黎(1897年12月4日～1898年2月15日 [2013]) 嚴復訳、219頁、333頁を参照。『天演論』連載版と『天演論』単行本(湖北沔陽慎始基齋版)とは字句の相違があるが、ここで検討した部分では、嚴復の意味するところは大きく変わっていない。

(26) 嚴復(1898年1月27日～2月4日)、61-62頁を参照。原文：臣惟中国之積弱，至於今為已極矣。此其所以然之故，由於内治者十之七，由於外患者十之三耳。

(27) 赫胥黎(1898 [1986]) 嚴復訳、1337頁。原文：由来墾荒之利不利，最覘民種之高下。

ペンサーは、政府に欠点はあるものの、何事にも政府の干渉を期待する国民を批判した。ここで挙げられているイギリス政府各部門の具体的問題点について、嚴復は『勸学篇』で以下に見るように細部を省略している（例2）<sup>(28)</sup>。その理由は彼の翻訳の意図を損なうイギリス政治の欠点を強調しなくなかったからだろう。

例2：原文（『社会学研究』）：…chaos at the Admiralty, or cross-purposes in the dockyards, or wretched army-organization, or diplomatic bungling that endangers peace, or frustration of justice by technicalities and costs and delays, … (p. 3)

原文の意味：海軍部が無秩序であり、海軍工廠は相反する意図を持ち、軍隊機構は粗末であり、外交ミスは平和を危うくし、細かい規則、費用、遅延などは裁判を妨害している。

訳文（『勸学篇』）：……国家現辦之政，如海部如船廠如軍政如刑獄如邦交，百司紛紜，日滋紕繆……（『国聞彙編』第一冊、13頁）

訳文の意味：国家が現在行っている政治に関しては、海軍部、船工廠、軍隊政治、刑罰、外交など、各部門が問題を抱え、日々もめごとが起きている。

例2ではスペンサーの指摘する個々の問題点を嚴復の訳文はひとまとめに扱って原文の調子を弱めている。例3ではさらにこの傾向は明らかである。

例3：原文（『社会学研究』）：Over his pipe in the village ale-house, the labourer says very positively what Parliament should do about the “foot and mouth disease.” At the farmer’s market-table, his master makes the glasses jingle as, with his fist, he emphasizes the assertion that he did not get half

---

(28) 本稿が引用するスペンサー『社会学研究』は、Herbert Spencer (1873) を参照。本稿が引用する嚴復訳『斯賓塞爾勸学篇』は、斯賓塞爾 (1897年11月24日～1898年1月7日 [2013]) 嚴復訳を参照。『斯賓塞爾勸学篇』の原文には句読点がないので、筆者が付した。また、『社会学研究』の原文の解釈及び『勸学篇』の訳文の解釈は筆者による。

enough compensation for his slaughtered beasts during the cattle-plague. (p. 1)

原文の意味：農業労働者は村の居酒屋でパイプ煙草を吸いながら、議会は口蹄疫に対してどう対処すべきかと積極的に意見を述べる。農家のマーケットテーブルでは、彼の雇い主がグラスをカチカチ鳴らし、こぶしを固めて疫病の流行中に殺された牛の補償は半分もしてもらえなかったと言いつのる。

訳文（『勸学篇』）：田事告隙，口煙捲，手酒卮，箕坐山邨酒肆間。三四佃傭，高睨大談，説牛疫盛行，議院宜有補救之術。農頭奮髯抵几，杯捲鏗然，與相應罵，今歲屠牛，利入不及往年之半。（『国聞彙編』第一冊、11頁）

訳文の意味：農作業がひとまず暇になると、（人々は）巻きたばこを吸って、さかずきを手に、山村の居酒屋に両足を踏ん張って座わる。農作業に従事する雇人三四人は、高所を睨み、偉そうに話す。牛の疫病がはやっているのだから、議院は対策を講じるべきだと。農家の雇い主はひげを振ってテーブルを押し、さかずきをカチカチ鳴らし、雇人の話にに応じて共に罵る。今年は牛を殺しても、利益は以前の年の半分にもならない、と。

例3が示すように、スペンサーは『社会学研究』の中で、農業労働者（the labourer）が村の居酒屋（the village ale-house）で話し、雇い主（master）は農家のマーケットテーブル（the farmer's market-table）で話す様子を描いている。雇人と雇い主がそれぞれ別の場所で酒を飲む様子はかなり写実的で、イギリス社会における階級差を反映している。その一方、厳復は『勸学篇』の中に、農作業に従事する雇人（「佃傭」）と農家の雇い主（「農頭」）が山村の居酒屋（「山邨酒肆」）で一緒に話している様子を描いている。この文は全書の冒頭にあり、厳復の英語能力を考えるならば、彼が冒頭から文意をとり違えるはずはない。むしろ意図的に訳文の中で階級差をなくし、イギリスの農家の雇人と雇い主が同じ居酒屋で対等に話をする様子を中国人読者に示そうとしたのではないだろうか。

要するに、『天演論』及び『勸学篇』の訳文は意図的にイギリスのマイナス面の記述を回避したり、弱めたりするのである。

## 2 民力、民智、民徳

『進化と倫理』はイギリスがどのようにして高度な発展を遂げてきたのかに言及せず、ただイギリスの植民地建設について触れているだけである。それにもかかわらず、嚴復はそれを利用して自らの政治思想を開陳しようとした。たとえば、ハクスリーは原著で「統治者 (the administrator) はその目的を達成するために、入植者の勇気や勤勉さ、共働的知性 (the courage, industry, and co-operative intelligence of the settlers) を利用しなければならないだろう」と語るのに対し、嚴復は「入植者の勇気や勤勉さ、共働的知性」を「民力、民智、民徳」と翻訳する (例 4)。

例 4 : 原文 (『進化と倫理』) : With every step of this progress in civilization, the colonists would become more and more independent of the state of nature; more and more, their lives would be conditioned by a state of art. In order to attain his ends, the administrator would have to avail himself of the courage, industry, and co-operative intelligence of the settlers; ... (p. 19)

原文の意味 : こういった文明の進歩の一つ一つの段階と共に、入植者はいよいよ自然の状態から独立するようになり、彼らの生活はいよいよ技芸の状態によって条件づけられるようになる。統治者はその目的を達成するために、入植者の勇気や勤勉さ、共働的知性を利用しなければならないだろう (100-101 頁)。

訳文 (『天演論』) : 凡如是之張設, 皆以民力之有所屈, 而為致其宜, 務使民之待於天者, 日以益寡, 而於人自足恃者, 日以益多。且聖人知治人之人, 固賦於治於人者也。凶狡之民, 不得廉公之吏; 偷懦之衆, 不興神武之君。故欲致治之隆, 必於民力、民智、民徳三者之中, 求其本也。故又為之學校庠序焉。學校庠序之制善, 而後智仁勇之民興。 (導言八、烏托邦、1339 頁)

訳文の意味 : このように施設を整えることは皆、民力が不足するがゆえにその宜を致そうとするからである。民が天の恵みを待つことを日々少なくし、自力を恃む者を日々増すように務める。また、聖人は、人を治める人間は、治められる人から認識を得るものだということを知っている。凶悪かつ狡猾な人民から廉潔の官吏は得られない。怠惰で気の弱

い衆人から英明かつ武勇の「君」(君主)は出てこない。故に、世をよく治めて隆盛を極めようとするれば、民力、民智、民徳の三者の中に、そのもとを求めなければならない。故にまた民のために学校教育制度を整え、それが善であれば、その後、才智、仁心、勇気を持つ民が盛んに現れるのである。

加筆部分(波下線の部分)については、本稿第Ⅱ章第2節の後半と第Ⅲ章第3節の前半で細かく分析するが、概観すれば、この訳文(一重下線の部分)から2つの問題関心が見てとれる。

まず、嚴復は「入植者」(the colonists, the settlers)を「民」に置き換えた。否定的印象を与える植民地に関する表現を弱めると同時に、意図的な読み替えでもありと思われる。つまり、嚴復は統治者が民をどのように統治すべきかについて関心を持っているのである。次に、山下が指摘したように、「嚴復は、富強のキー・ワードとしての「民力・民智・民徳」を訳文中に織り込んだ」<sup>(29)</sup>。嚴復はこの翻訳を発表する以前に、すでに『原強』(1895年3月)で「民力、民智、民徳」を提唱しはじめ<sup>(30)</sup>、『原強修訂稿』(1896年10月以後)では、それをさらに具体化している<sup>(31)</sup>。民種の水準は3つの要素、即ち、民力、民智、民徳によって測られると彼は主張するのである。『天演論』のみならず、『勸学篇』にも「智徳力」、「民智」、「民力」のような原著にない言葉が現れている(例5、例6)。

例5：原文(『社会学研究』)：When there arises the question—Why does not Government do this for us? there is not the accompanying thought—Why does not Government put its hands in our pockets, and, with the proceeds, pay officials to do this, instead of leaving us to do it ourselves; but the accompanying thought is—Why does not Government, out of its inexhaustible resources, yield us this benefit? (5-6頁)

原文の意味：なぜ政府はこれを私たちのためにしてくれないのかとい

---

(29) 山下重一(2000)、178頁。

(30) 嚴復(1895年3月4日～9日)、14頁を参照。

(31) 嚴復(1896年10月以後)、18頁を参照。

う問いが生じるとき、この問いに付随して——なぜ私たちが自分でやる代わりに、政府が私たちのポケットに手を突っこんで得たその収益から役人に支払ってやらせようとししないのか、とは考えない。そうではなく、彼らはなぜ政府は自分のもつ無尽蔵の資源の中から私たちのために利益をもたらしてくれないのか、と考えるのである。

訳文（『勸学篇』）：彼見一事宜興，則瞋目語難曰，奈何不為是以福我。及見征調煩重官吏冗雜，則又蹙額相告曰，奈何竟為是以苦我噫。我知之矣。彼固謂國家者，無所不能而無待於民力民智也。（『国聞彙編』第一冊、15頁）

訳文の意味：彼らはあることがなされるべきだと見れば、すなわち目を怒らせて非難して言う。なぜこれをやって我々に福をもたらさないのか。（人や物を）ふんだんに徴用し官吏が多くて繁忙であるのを見ると、すなわちまた額にしわをよせてお互いに語り合う。なぜこんなことで我々を苦しめるのか、と。筆者はこれ（彼らの問題）を知っているのだ。彼らは国家というものがなんでもでき、「民力民智」の向上を待つ必要がないと主張する。

例5のように、スペンサーは原著で、一部の人間は因果関係が分からず、代価も払わずに何事も政府にやってもらいたがることを批判しているが、嚴復はこれに加筆してこのような人々の「民力民智」の向上を待つ必要性を訴えている。

例6：原文（『社会学研究』）：Nay more, the study of Sociology, scientifically carried on by tracing back proximate causes to remote ones, and tracing down primary effects to secondary and tertiary effects which multiply as they diffuse, will dissipate the current illusion that social evils admit of radical cures. Given an average defect of nature among the units of a society, and no skillful manipulation of them will prevent that defect from producing its equivalent of bad results. It is possible to change the form of these bad results; It is possible to change the places at which they are manifested; but it is not possible to get rid of them. (pp. 21-22)

原文の意味：さらに、社会学研究は、科学的に近因から遠因へと追跡し、拡散伝播によって増していく影響を最初期から第二、第三へと追跡することによって実施され、社会の害悪がラディカルな解決策を許容するという昨今の錯覚を消散させる。社会の単位間に生来のありふれた欠陥があるならば、どんなに巧みにそれらを操作しても、その欠陥がもたらす悪い結果と見なしうるものが生じることは妨げられない。これらの悪い結果の形を変えることは可能であろうし、悪い結果が明らかになる場を変えることも可能だろうが、それらを排除することは不可能である。

訳文（『勸学篇』）：而無俟深求者，不知群学之事，考察益密，则措手益觉其難。由近因而及遠因，自近果而及遠果，止須至二三層，其繁便不可勝計。乃知群中秕政弊俗，拯之至難。蓋秕弊二者，皆群形之見端，使為群質点之衆民，其智德力三者卑，卑則雖有至美至良之政術，皆將無補於治。（『国聞彙編』第四冊、207頁）

訳文の意味：しかし、深く探究することができない者は、「群学」(sociology の翻訳語、社会学) は、綿密に考察すればするほどますます手がつけられず困難を覚えるものだということを知らない。近因から遠因に及び、近い結果から遠い結果まで、二、三層追跡するだけで、その複雑さは予測できないほどである。すなわち、「群」(社会) の悪い政治や悪い風俗を救うのは至難の業であることが分かる。蓋し悪い政治と悪い風俗の二者は、ともに群の形(外在)を知る明らかな手がかりである。仮に「群」(society の翻訳語、社会) の「質点」(unit の翻訳語、単位) である衆民の「智徳力」が三者とも劣っていれば、どれほど完璧な政策があっても、(悪い政治と悪い風俗を) 治すことはできない。

その他、例 6 が示すように、原著は、安易な状況判断によって社会の害悪 (social evils) を直ちに根治しようとする行為を批判しているが、厳復はここでも民の「智徳力」の重要性を巧みに訳文に織り込んでいる。

つまり、『天演論』と『勸学篇』における民力、民智、民徳という原文にない概念の導入は、厳復が民種の水準を非常に重視していたことを証している。

それでは、どのようなきっかけで厳復は民力、民智、民徳を重視するよ



うになったのだろうか。『原強修訂稿』(1896年10月以後)のなかで嚴復は、「『勸学篇』は、読者に「群学」(社会科学)を学ばせる書であり、「知恵」、「体力」、「徳行」の向上を要点とする」と述べている<sup>(32)</sup>。ここで言う『勸学篇』は前述したように『社会学研究』の全書を指している。『社会学研究』の第五章には、結婚に関して次のように書かれている。結婚の可能性は常に財力に規定されている。財力のある男性は結婚しやすい。体力、知力、道徳がすべて優れている人間 (the strong, the intellectually capable, the morally well-balanced) のほうが成功者になりやすく、多くの収入を得られる。また、女性にとって、体力、感情、知力が優れている男性 (men of power—physical, emotional, intellectual) は魅力的であるという<sup>(33)</sup>。さらに、第八章では、社会と社会間の競争 (a competition of societies) で、体力、感情、知力が優れている人間 (the best, physically, emotionally, and intellectually) は最も勢力を広げるのに対し、無能な人間は子孫を残せなくなり、次第に滅亡への道をたどると指摘されている<sup>(34)</sup>。『社会学研究』では、ある時は「体力、知力、道徳」、ある時は「体力、感情、知力」というように統一的用語を用いているわけではないが、スペンサーが3つの方面から人間の素質を判断していることは明らかである。個人生活であれ、集団競争であれ、体力、道徳／感情、知力が優れている人間は成功を遂げやすい。嚴復はスペンサーのこのような論述に啓発され、民力、民智、民徳に関心を持つようになったのだと思われる<sup>(35)</sup>。

嚴復の「民」に対する関心はスペンサーの社会有機体説に基づいており、

---

(32) 嚴復 (1896年10月以後)、17頁。原文：『勸学篇』者，勉人治群学之書也。其教人也，以溶智慧、練体力、励德行三者為之綱。

(33) Herbert Spencer (1873), pp. 93-95を参照。

(34) Herbert Spencer (1873), p. 199を参照。

(35) 因みに、黄克武は、嚴復が『原強』でスペンサーの著書 *Education: Intellectual, Moral and Physical* (1891年、『明民論』) に言及していることを理由に、同書の説に啓発されて例4のように訳文を工夫したと指摘している。しかし、前述したように、1895年3月の『原強』では、『勸学篇』(*The Study of Sociology*, 1873年)の内容は詳細に説明されているが、『明民要論』はただ一箇所、書名が言及されるにとどまっている。『原強修訂稿』で『明民要論』は『明民論』という書名になったが、同書についての言及もごく簡単である。スペンサーの両書の出版年、嚴復の重視傾向から見れば、嚴復は『明民論』より、むしろ『勸学篇』のほうから影響を受けたのではないだろうか。黄克武 (2014)、151頁；嚴復 (1895年3月4日～9日)、6頁；嚴復 (1896年10月以後)、17頁。

この主張は『社会学研究』に散見される。第十四章では、「社会全体に見られる成長、構成、機能などの現象は、…人間の成長、構成、機能と似ている」<sup>(36)</sup>、しかも、社会の進化は生物の進化のように、低級から高級へと進み、組織は発達して複雑化していくと述べている。また、『社会学研究』の第三章では、社会全体の特徴は社会を構成する個体 (individual) の特徴によって決められるという見解が強調されている<sup>(37)</sup>。社会を生物有機体と類比し、進化論で社会を説明するのである。嚴復がこの社会有機体説を支持していることは疑う余地がない。『原強』(1895年3月)では「一国はあたかも一身のようである」<sup>(38)</sup>と強調されており、彼は社会有機体説を受容した上で、「民」に関心を持つようになったと考えられる。ただし、スペンサーの「個体／個人」は社会を構成する個々の人々であるのに対し、嚴復の「民」は統治されている人々全体であり、民だけでは社会を構成できない。嚴復が理解した社会有機体説はスペンサーの理論とずれがあることに注意すべきである。

民種の重要性を唱えるために、嚴復は『天演論』の訳文中に次のような一文を挿入した。「凶悪かつ狡猾な人民から廉潔の官吏は得られない。怠惰で気の弱い衆人から英明かつ武勇の「君」(君主)は出てこない」(例4)。

この主張もまたスペンサーから影響を受けたように思われる。『社会学研究』の第十六章でスペンサーは、統治者側を責めるばかりで被治者階級 (the classes regulated) を責めないという考え方<sup>(39)</sup>を批判し、「権力を持つ人間の不正は権力を及ぼされる人間の不正に関係がある」という<sup>(40)</sup>。このような認識を持つスペンサーは当然フランス革命に反対し、『社会学研究』の第六章に次のように記している。「三代にわたる長い年月、フランスはある事実を世界に何回も証明している。即ち、革命を通して社会構造を本

---

(36) Herbert Spencer (1873), p. 330. 原文: ... a society as a whole, ... presents phenomena of growth, structure, and function, like those of growth, structure, and function in an individual body; ...

(37) Herbert Spencer (1873), pp. 50-59を参照。

(38) 嚴復 (1895年3月4日～9日)、7頁。原文: 夫一国猶一身也。

(39) Herbert Spencer (1873), p. 398. 原文: The implication seems ever to be that all who occupy places of power, and form the regulative organization, are alone to blame for whatever is not as it should be; and that the classes regulated are blameless.

(40) Herbert Spencer (1873), p. 398. 原文: misconduct among those in power is the correlative of misconduct among those over whom they exercise power.

質的に変えるのは不可能である」<sup>(41)</sup>。スペンサーは社会の進化が漸進的であるべきだと考えているのである。

中国の現状について嚴復は「民智はもはや低下し、民徳はもはや衰え、民力はもはや弱まっている」と見る<sup>(42)</sup>。彼はこの3つの要素を根本課題として解決しなければならないと主張する一方で、民力、民智、民徳の向上には数十年から百年もかかることがあり得ると述べている<sup>(43)</sup>。スペンサーの思想を受容した嚴復は、同じく漸進的に中国を改革しようと考えている<sup>(44)</sup>。嚴復は少年時代からイギリスの言語や人間などに接触し、青年時代はイギリスで留学生活（1877年～1879年）を送った。全盛期に達したヴィクトリア朝時代（1837年～1901年）は彼に圧倒的な感化を及ぼしたに違いない。その結果、漸進的な社会進化に傾倒した嚴復はイギリスのような漸進的な近代化を理想的なモデルと考えたのだろう。

### 3 合群と自治

嚴復は『天演論』の導言七の案語でイギリス人の国民性を次のように記述している。「イギリスの民は航海や商売が得意で、性格が賢く粘り強い。それだけでなく、彼らは自治を実施し、「合群」（社会を団結させること）の方法を知っている」<sup>(45)</sup>。そもそも、嚴復は社会有機体が「民」から構成されていると理解したため、その富強が、民の民種水準の高さと「合群」の力に依拠していると見たことは当然であった。

『天演論』では、「合群」は sociability（社交性）の訳語である。『進化と倫理』の文脈では、社交性（sociability）は人間（man）同士が協調協力して野蛮な状態（the savage state）から抜け出すための一つの重要な要素で

---

(41) Herbert Spencer (1873), p. 121. 原文：Again and again for three generations has France been showing to the world how impossible it is essentially to change the type of a social structure by any re-arrangement wrought out through a revolution.

(42) 嚴復（1895年3月4日～9日）、13頁。原文：今夫民智已下矣、民徳已衰矣、民力已困矣。

(43) 嚴復（1895年3月4日～9日）、9頁、14頁を参照。

(44) 嚴復が漸進的な改革を主張していることは、すでに手代木有見、B. I. シュウォルツ、王中江によって指摘されている。手代木有見（1987）、69頁；B. I. シュウォルツ（1978）平野健一郎訳、67頁；王中江（2010）、84頁を参照。

(45) 赫胥黎（1898 [1986]）嚴復訳、1338頁。原文：此不僅習海擅商、狡點堅毅為之也、亦其民能自治、知合群之道勝耳。

ある<sup>(46)</sup>。つまり、sociability という語は、原著では危機を乗り越えるために個々の人間の間に必要な協調協力を生み出す人間的特性を意味している。近代中国の危機を乗り越えるためには人間同士の協調協力が必要となるが、このような社会の結合力を高める要素として、嚴復は愛国心に注目していた。彼は『辟韓』(1895年3月)、『原強修訂稿』(1896年10月以後)、『論胶州章鎮高元讓地事』(1897年11月)、『擬上皇帝書』(1898年1月～2月)、『有如三保』(1898年6月)、『保教余義』(1898年6月)などの戊戌政変以前の時局論文で、中国人の愛国心が低いことをしばしば批判する一方、西洋人の愛国心を称賛している。彼は西洋の民の愛国心が高い理由を民主制にあると解釈し、民主制があるからこそ、国家の利益は民の利益となり、国家のために戦うことは自分のために戦うことに相当すると考えた<sup>(47)</sup>。つまり、嚴復が捉えた西洋の近代的な愛国心は、民主制と一体のものである。

民主制のベースである「自治」も、嚴復が常に強調したキーワードである。例えば、『原強修訂稿』(1896年10月以後)は「自治」の重要性を次のように訴えている。「富強とは、本質から言えば、民に利益をもたらすことにほかならない。そして政治が民に利益をもたらすためには、まず民が自分で利益を獲得できるようにならなければならない。自分で利益を獲得するには、まずみな自由を得なければならない。民が自由を得るには、まず民が「自治」能力を持つことから始めなければならない<sup>(48)</sup>。つまり、民の自治能力が富強の基本的条件である。しかも、嚴復は『辟韓』(1895年3月)で、民種の水準が高くなれば、自治能力が涵養され、民は自由を得ることが可能となると述べている<sup>(49)</sup>。したがって、民種水準の向上は

(46) Thomas H. Huxley (1894), p. 51を参照。次の文で sociability は「合群」と訳されている。原文：For his successful progress, throughout the savage state, man has been largely indebted to those qualities which he shares with the ape and the tiger; his exceptional physical organization; his cunning, his sociability, his curiosity, and his imitiveness. 『天演論』の訳文：是故渾荒之民，合狙與虎之德而兼之，形便機詐，好事効尤，附之以合群。(論二・憂患、1363頁)

(47) 民主制と愛国との関係について、嚴復(1895年3月13日～14日)、36頁；嚴復(1896年10月以後)、31頁；嚴復(1898年1月27日～2月4日)、73頁を参照。

(48) 嚴復(1896年10月以後)、27頁。原文：夫所謂富強云者，質而言之，不外利民云爾。然政欲利民，必自民各能自利始；民各能自利，又必自皆得自由始；欲聽其皆得自由，尤必自其各能自治始；……

(49) 嚴復(1895年3月13日～14日)、35頁を参照。

もっとも根本的な課題であり、民種水準が高くなるにつれて自治能力、自由、民主、愛国心などが次々と身につく、国の富強が遂げられる、ということになる。これが、嚴復が捉えたイギリスモデルの特徴である。

『社会学研究』の中で、スペンサーは明確に自由放任主義を主張している。国家による統制や干渉を排除し、国民に自由に個人の利益を追求させる。19世紀後半のイギリスはすでに帝国主義の段階に至り、スペンサーの主張と乖離していた。スペンサーが定義した産業型社会はむしろ帝国主義の段階に入る以前のイギリス社会を典型としていたからである。つまり、近代的商業社会である。では、嚴復が捉えたイギリス像はスペンサーが定義した産業型社会なのだろうか、それとも、嚴復の目で観察した帝国主義のイギリス社会なのだろうか。シュウォルツが指摘した通り、嚴復自身さえこの二つを明確に区別していなかったように思われる。「スペンサーとヴィクトリア朝イギリスは、富強に対する嚴復の最大関心をとおして屈折される時、ぼんやりと一つに溶け合って、調和のある全体をつくってしまうのであった」<sup>(50)</sup>。産業型社会のイギリスと帝国主義のイギリスを混同していたとは言え、嚴復はイギリスの富強の原理がスペンサーの説の通りだと認識し、スペンサーの政治理論に魅了されたに違いない。

### III 現実的な政治モデル

#### 1 緊迫感を伝える訳文

しかしながら、イギリスの近代化は長い年月を経てようやく達成されたものである。スペンサーの説を支持する嚴復にとって、中国の状況は焦慮をかきたてた。このような緊迫感が彼の訳文からも読み取れる。

『進化と倫理』は非常に学術的に生存競争の物理的展開を描き、将来の人口増加がもたらしうる結果を論じているので、その記述は読者に当今社会の危機感をあまり感じさせない。ところが、その訳書である『天演論』を読むと、生存競争の悲惨さが前面に押し出され、中国人読者に中国の置

---

(50) B. I. シュウォルツ (1978) 平野健一郎訳、68頁。

かかれている危機的状況を連想させる。嚴復は「亡」、「絶」、「滅」、「殤」など滅亡を表す言語をしばしば用いて訳文を補筆・敷衍し、ハクスリーの言葉であるかのように見せかける<sup>(51)</sup>。区建英は、「嚴復が『天演論』を通じてダーウィニズムを中国に導入したことは、従来の循環論的歴史意識と、華夷優劣の観念に革命的な衝撃を与え、「亡国滅種」の警鐘を鳴らした」と指摘している<sup>(52)</sup>。

また、同様の加筆は『社会学研究』の第一章の訳『勸学篇』にも見られる(例7、例8)。

例7：原文(『社会学研究』)：The extreme complexity of social actions, and the transcendent difficulty which hence arises of counting on special results, will be still better seen if we enumerate the factors which determine one simple phenomenon, as the price of a commodity, —say, cotton. A manufacturer of calicoes has to decide whether he will increase his stock of raw material at its current price. (p. 18)

原文の意味：社会的行為は極めて複雑であり、したがって、例外的な結果を予想するのも極めて困難である。一つの単純な現象、例えば、コットンのような日用品の価格を決める諸要素を数え上げてみれば、それがどれほど困難なのか明らかになる。キャラコ製造業者を例にとれば、彼は原材料の在庫を増やすかどうかの決断を現在の価格をもとに行わなければならないからである。

訳文(『勸学篇』)：是故群理難知，以其為天下至繁之物。此宜徒保種謀国者，所宜兢兢者耶。即在尋常一生計貿易之間，其難已見矣。今試設一織布廠主人，必欲趁現時市價增囤棉花。(『国聞彙編』第三冊、145頁)

訳文の意味：これが故に、群れの理は知り難く、それは天下においてもっとも複雑なものである。「保種謀国者」(種族と国を守ることに努める人)だけがそれを慎重に検討すべきなのだろうか。(そうではない。)

(51) たとえば、『天演論』の加筆：且由是而立者強，強者昌；不立者弱，弱乃滅亡(導言六・人訳、1335頁)；Thomas H. Huxley (1894), p. 13を参照。『天演論』の訳文に緊迫感があることはすでによく知られているので、ここでは詳述しない。

(52) 区建英(2009)、113-114頁。

ごく一般的な生計貿易においても、その難しさがすでに窺える。今たとえば、ある織布工場の工場主が、現在の市場価格を好機と見て綿花の在庫を増やしたいとしよう。(この後で嚴復は、この工場主の見通しの甘さに言及する。)

ここで嚴復は二つのセンテンスの訳文の間に、さらに「「保種謀国者」(種族と国を守ることに努める人)だけがそれを慎重に検討すべきなのだろうか」という文を加筆した。常に種族と国の保持を念頭に置き、憂慮しているからこそ、この一文を挿入したのだろう。

例8：原文(『社会学研究』)：Not only has a society as a whole a power of growth and development, but each institution set up in it has the like—draws to itself units of the society and nutriment for them, and tends ever to multiply and ramify. (p. 19)

原文の意味：社会だけが全体として成長と発展の力を持つのではなく、その中に設けられた各機関もまたそのような傾向を持っており、——社会の単位を各機関に引き寄せて滋養分を与え、常に繁殖し、枝分かれしていく傾向がある。

訳文(『勸学篇』)：此不僅群為大物然也。即群中一教之立，一政之成，其理莫不如是。蓋天演無在而不然，而物競天択之用，政教実同。夫動植皆能吸質点以為滋長収養已者以為自存。或孳乳而寝多，或蔓延而墳植。(『国聞彙編』第三冊、147頁)

訳文の意味：これはただ「群」(societyの翻訳語、社会)が大きいからそうなのだというわけではない。たとえ「群」の中の「教」(教化)の成立や「政」(政治)の成立であっても、その理がこのようではないものはない。蓋し「天演」(evolution、evolutionary theoryの訳語)はどこにも存在し、「物競天択」(生存競争、自然淘汰)の力は実は「政教」(政治教化)にも働く。動植物というものはみな「自存」のために、「質点」(unitの翻訳語、単位)を吸い込んで、滋養分を与えて成長させ、或は繁殖してしだいに多くなり、或は蔓を延ばして枝分かれする。

また、例 8 が示すように、スペンサーは原文で社会有機体説を展開している。彼は社会を生物有機体になぞらえる故に、社会有機体が生物のように進化論の法則にしたがうことも当然の論理である。嚴復はスペンサーの一元論的な社会進化論を理解した上で、「天演」(evolution、evolutionary theory の訳語)、「物競天択」(生存競争、自然淘汰)の力が「政教」(政治教化)にも働くと加筆している。「政」と「教」に焦点を当てるために、意図的に each institution set up in it (その中、即ち、社会の中に設けられた各機関)を「群中一教之立、一政之成」(社会の中の教化の成立や政治の成立)と訳し変えているのである。しかも、彼は中国の「政教」、とりわけ存亡の危機に関心を持っているので、加筆して「自存」という概念を織り込んでいる。

さらに、『天演論』の導言十六の案語は「変化の遅速は、常に圧力の緩急とかかわっている」と指摘し<sup>(53)</sup>、強い外圧が進化を加速しようという肯定的側面にも触れている。中国は様々な危機に直面し、欧米列強から多大な圧力をかけられているので、急速に変化を遂げる可能性を持っていると嚴復は考えるのである。

## 2 訳語選択から窺える聖人の存在感

嚴復は近代化を加速させるために、中国人に刺激を与えるだけでなく、「聖人」に期待を寄せた。例えば、『天演論』には、「聖人」という語が19回も現れている。浦嘉珉 (James Reeve Pusey) は嚴復の戊戌政変以前の時局論文を分析したうえで、「聖人」(sage) は「ここでただ哲学王 (philosopher-kings) や哲人 (philosophers) を指すだけではなく、突如として中国のすべての統治者 (all China's rulers) を指しているように思われる」<sup>(54)</sup>と述べているが、筆者が検討したところではそうではない。

嚴復は「聖人」を「統治者」(administrative authority/ the administrator) の訳語として用いている。『進化と倫理』では、「統治者」とは植民地の統治者を指している。ハクスリーは「力の点でも知性の点でも人間 (men) をはるかに凌駕し、それゆえ人間が家畜扱いされるほどの力量の統治者

(53) 赫胥黎 (1898 [1986]) 嚴復訳、1355頁。原文：故変之疾徐，常視逼撓者之緩急。

(54) James Reeve Pusey (1983), p. 54.



(administrative authority)<sup>(55)</sup>の存在を次のように想像している。普通の人間よりはるかに優れた統治者は植民地の中でいろいろと工夫し、植民地の繁栄を実現する。しかし、植民地の繁栄にともない、人口がいつしか限界にまで達すると、統治者は専制的に余剰人口をなんらかの形で処理(dispose)せざるをえない。このような文脈にある絶対的権力を持つ統治者の訳語として、嚴復は「聖人」という中国本来の語を用い、偉大な統治者を表そうとしたのである。この意味での「聖人」は『天演論』で計15回現れており、残りの4回の「聖人」は孔子、墨子、老子、莊子、孟子、仏陀(釈迦牟尼)、ソクラテスなど非常に高い学識を持つ哲学者を指している。

したがって、「聖人」は偉大な統治者、あるいは極めて高い学識や人望を持つ哲学者を指すと考えられるが、特に注目に値するのは『天演論』の論十六の訳文である(例9)。

例9：原文(『進化と倫理』)：It demands that each man who enters into the enjoyment of the advantages of a polity shall be mindful of his debt to those who have laboriously constructed it; and shall take heed that no act of his weakens the fabric in which he has been permitted to live. (p. 82)

原文の意味：一つの政治組織体の利益を享受する人々は、この政治組織体の建設に尽力した人々の恩義を忘れてはならず、自らの行為によって自身の生存が許されている組織を弱体化しないように注意すべきである。(157頁)

訳文(『天演論』)：前聖人既竭耳目之力，胼手胝足，合群制治，使之相養相生，而不被天行之虐矣。則凡游其宇而蒙被庥嘉，当思屈己為人，以為酬恩報德之具。(論十六・群治、1395頁)

訳文の意味：過去において、「聖人」は力を尽くし、手にはたこ足にはまめができるほど努力して、「群」(社会)を團結させ、政治を行い、民の助け合いを励まし、宇宙過程に脅かされないようにした。「其宇」(彼

---

(55) T・H・ハクスリー(1995)小林傳司訳、99頁。Thomas H. Huxley(1894), p. 17. 原文：Let us now imagine that some administrative authority, as far superior in power and intelligence to men, as men are to their cattle, is set over the colony, ...

の国土)に暮らして利益を享受する人々は、その恩徳に報いるために、自分の利益を軽んじて他人のために努力すべきである。

ここでは、「この政治組織体の建設に尽力した人々」(those who have laboriously constructed it)が「聖人」と翻訳されている。前述したように、ハクスリーは普通の間人よりはるかに優れた統治者を想像したが、結局のところ、その優れた統治者にも限界があることを指摘し、宇宙過程と戦うには、やはり倫理過程のほうが重要だと主張している。原文は『進化と倫理』の最後の部分であるが、ここには植民地や統治者に関して一切書かれてはならず、宇宙過程の悪影響を受けないために個人と共同体／国家とはどのような関係にあるべきなのかが論じられている。19世紀の末、イギリスの近代化はすでに完成し、中産階級は歴史の舞台上で大活躍し、社会の構成員としての個人の役割が重視されていた。政治組織体は個々の人間によって作り上げられているのだから、そこで暮らす個々人は共同体／国家に対する個人の義務(the duties of the individual to the community/ state)を忘れてはならないとハクスリーは強調する<sup>(56)</sup>。ところが、嚴復は訳文で聖人の役割を相当に強調しており、聖人は民に恩徳を施したことにより、民は彼に恩徳を返すべきだと主張している。しかも、「其宇」(彼の国土)という言葉は、国家が聖人の支配下にあることを意味する。このような用語法はこの3年前に書かれた『辟韓』(1895年3月)での主張と相違しているように見える。

この時局論文で、嚴復は「君」と「民」の上下関係がやむをえない事情から生じたもので、君が存在する価値は、社会内部の弱肉強食を抑制し、「自治」能力のない民を守ることにあると主張していた。嚴復にとって、「民は、元来は天下の真の主人」<sup>(57)</sup>である。しかし、現実には、儒教的な上下関係が中国社会に深く根付いており、この時局論文は発表された直後、重臣で

---

(56) 原著では、「政治組織体」(polity)、「共同体」(community)、「国家」(state)のように用語が統一されていない。例えば、「Laws and moral precepts are directed to ... reminding the individual of his duty to the community」、「the duties of the individual to the state are forgotten」などと表現されている。Thomas H. Huxley (1894), p. 82を参照。

(57) 嚴復(1977)近藤邦康訳、439頁。嚴復(1895年3月13日～14日)、36頁。原文：斯民也、固斯天下之真主也。

あった張之洞（1837年～1909年）を始めとする士大夫を激怒させ、反駁を招いた<sup>(58)</sup>。その後、『辟韓』のような極めて激しい論調は見られなくなったが、嚴復はその主張を放棄したというより、むしろ士大夫の反感を招きやすい言論を回避したように見える。

政治組織体／共同体／国家に対する個人の義務を、聖人に対する民の忠誠心に読み換えたことは、西洋の近代的な愛国心の代わりに封建的な「忠君愛国」を主張することを意味している。前述したように、嚴復が捉えた西洋の近代的な愛国心は、民主制と一体のものである。近代化が漸進的に進まざるをえないならば、近代的な愛国心が中国で生まれるまでには長い年月が必要だろう。その一方、目前の危機を乗り切るためには、中国人を速く団結させなければならない。そこで、嚴復は君主への忠誠心に注目したのだと思われる。『擬上皇帝書』（1898年1月～2月）では、「忠君愛国」という言葉を取り上げ、民の心を結びつけるための方策が提言されている。その方策とは、皇帝が西洋諸国訪問の帰途に、沿海各省の民生および軍事訓練を視察し、自ら民と接してその忠誠心を高めるというものである<sup>(59)</sup>。そうすれば、民は皇帝のために忠誠を尽くすだろうと彼は考えた。

また、「聖人」という語の存在感はほかの訳語からも読み取れる。例を挙げれば、嚴復は『天演論』で the ethical process（倫理過程）を「治化」と訳している（例10）。

例10：原文（『進化と倫理』）：I have termed this evolution of the feelings out of which the primitive bonds of human society are so largely forged, into the organized and personified sympathy we call conscience, the ethical process. (p. 30)

原文の意味：人間社会の原初的絆が大いに鍛えられ、その絆がわれわれが良心と呼ぶような共感へと組織化され人格化されていく過程を、私は倫理過程と名付けたことがある。（109-110頁）

訳文（『天演論』）：群之所以不渙，由人心之有天良。天良生於善相感，其端孕於至微，而効終於極鉅，此之謂治化。（導言十四・恕敗、1348頁）

(58) 嚴復（1897）、733頁を参照。

(59) 嚴復（1898年1月27日～2月4日）、74頁を参照。

訳文の意味：「群」(human society の翻訳語、人間社会) がばらばらにならない所以は、人間の心に良心があるからである。良心はうまく相互に感応することから生まれ、その発端は極めて微小なものから生じて、その効果は終には極めて大きなものになる。これを「治化」という。

「治化」とは、統治者が政治を行って民衆を教化することである。その用例を中国古典に探ってみると、聖人とのかかわりが非常に緊密であることが分かる。賈誼（紀元前200年～紀元前168年）の『新書』には、太子に「聖人」の徳を学ばせるため、「治化」の準則を知ってもらわなければならない(60)。また、『孔子家語』には、「孔子曰く、聖人の治化するや、必ず刑政相參ぜしむ」(61)、即ち、聖人が治化を行う場合、その手段として、刑罰と政令はいずれも不可欠であると述べられている。これらの用例から、嚴復の「治化」にも統治者、とりわけ聖人の存在が前提とされていることが窺える。

また、『天演論』において、「治化」は the ethical process (倫理過程) の訳語であるだけではない (例11)。

例11：原文（『進化と倫理』）：But the influence of the cosmic process on the evolution of society is the greater the more rudimentary its civilization. (p. 81)

原文の意味：しかし社会の進化に及ぼす宇宙過程の影響が強ければ強いほど、その社会の文明は幼稚なのである。(157頁)

訳文（『天演論』）：治化愈浅，則天行之威愈烈。(論十六・群治、1394頁)

訳文の意味：治化が浅ければ浅いほど、宇宙過程の脅威は激しい。

例11では、「治化」が civilization (文明) の訳語としても使われている。

---

(60) 賈誼 (2003) 于智榮訳注、138-139頁を参照。原文：教之術備，使能紀万官之職任，而知治化之儀……此所謂学太子以聖人之徳者也。

(61) 宇野精一 (1996)、377-379頁。原文：孔子曰、聖人之治化也、必刑政相參焉。宇野精一による通釈：孔子が言う、「聖人が政治を執り人民を教化するなら、必ず刑罰と政治とを互いに組み合わせるのである」。

つまり、中国においては文明が聖人の政治的教化によって実現されるべきだと嚴復は考えているのである。

同じような姿勢が『勸学篇』にも見られる（例12）。

例12：原文（『社会学研究』）：Suppose now that to a man of science, thus careful in testing all possible hypotheses and excluding all possible sources of error, we put a sociological question—say, whether some proposed institution will be beneficial. (p. 10)

原文の意味：今、仮にある科学者が、すべての可能な仮説を慎重に検討し、すべての可能な誤謬の生ずる原因を除外するとして、この科学者に、ある社会科学的問い、例えば、ある提案された制度が有益であるかどうかという問いを発してみよう。

訳文（『勸学篇』）：而独至治群為政之事，則何如？今試於国家議大政、立大法時，而執前者察物之家，而訊以此政此法之利弊。（『国聞彙編』第一冊、21頁）

訳文の意味：ただ「治群為政之事」（社会を治め、政治を行うこと）にいたっては、どうか？今、仮に国家が重要な政事を議論し、重要な法律を作成する時、前記のような「察物之家」（a man of science の翻訳語、物事を考察する専門家）に、この政事この法律の利益と弊害について聞いてみよう。

例6がすでに示しているように、嚴復は「群」、「群学」というような翻訳語を作り出し、society（社会）を「群」と、sociology（社会学）を「群学」と訳している。さらに、この例12において、嚴復は sociological question（社会科学的問い）を「治群為政之事」（社会を治め、政治を行うこと）についての問いと翻訳している。社会を治めて政治を行う人とは統治者にほかならない。この訳語も統治者の存在が前提とされている。

### 3 加筆から読み取れる聖人の具体的な施策

嚴復が聖人の役割を強調していることは訳語選択だけでは十分に証明できない。西洋の概念を翻訳しようとしたとき、中国の知識人であれ、日本

の知識人であれ、いずれも漢籍からこれに対応しうる訳語を探し求める傾向があった。その際、その概念本来の意味からのずれが生じることも少なくない。とはいえ、嚴復は『勸学篇』に加筆して中国の君主を批判し、『天演論』の訳文の中に種々加筆して、聖人の具体的な施策を呈示した。

例えば、『社会学研究』において、スペンサーは人間の想念があり得ないようなふるまいにつながる例として、ユダヤ人の磔刑の道具であった十字架が教会建築に盛んに現れるようになったことを挙げ、このようなことは誰も予測しえなかったと述べている。嚴復はこれを翻訳した後で、本文より小さい文字で自分の感想を加筆している。「さらに私の補足を加えるならば、中国の孔子、曾子、子思、孟子が儒教を創立したのは民の知能を向上させるためであったが、後世の「王」は彼らの著作を官僚選抜試験に用い、民を愚かにする術として利用している」<sup>(62)</sup>。従来の教育及び官僚選抜試験に不満を抱えていた嚴復は当然、民種を真に向上させることができる教育を主張している。前述した『天演論』導言八の「故に（聖人は）学校を運営する。教育制度を整えるなら、「智、仁、勇」が備わる民が培われる」という加筆も同じ文脈にある（例4）。彼は1880年から1900年にわたり北洋水師学堂に勤めた経験から、教育が民種水準の向上に効果があると確信していたのだろう。教育に関する具体的な主張としては、他にも『救亡決論』（1895年5月）で八股文（科挙文体）を廃止し、西学を学ぶべきだと主張している<sup>(63)</sup>。

さらに、『天演論』導言十六で、彼は「統治者」（統治者）は人材を求めべきだと訳文に加筆した。統治者がそのために官職や金銭などの優遇条

(62) 原文（『社会学研究』）：Such a result could be as little foreseen as it could be foreseen that an instrument of torture used by the Jews would give the ground-plans to Christian temples throughout Europe. (p. 15) 原文の意味：ユダヤ人が使用する拷問の道具が、ヨーロッパ全土のキリスト教教会建築の平面図として使われることになるとはほとんど誰も予測しなかった。

訳文（『勸学篇』）：夫十字架乃行暴之器，等諸炮烙，而孰知伝為地基形制，必如是乃建神堂吾得得益之曰，中土之孔曾思孟，皆立教明民，而孰知後王即用其書，倡為制科，以行其愚民之術。（『国聞彙編』第三冊、142頁）

訳文の意味：それ十字架はすなわち暴行を行う器具であり、「炮烙」（中国の酷刑：銅製の円柱を加熱し、罪人は円柱に縛り付けられ、あるいは円柱の上を裸足で渡る）と同様のものである。それが後世に伝わって教会の平面デザインとなり、必ずこのように神の堂を建てるようになったことは、だれも予想しなかった。（加筆の翻訳は本文を参照のこと。）

(63) 嚴復（1895年5月1日～8日）、40-54頁を参照。

件を出せば、人民はみなそれを目ざして競争し、競争することが慣例となる<sup>(64)</sup>。つまり、統治者は競争をしかけて民種水準を向上させることができるというのである。

また、ハクスリーのプロレゴメナ XIV が、社会における競争、即ち享楽の手段をめぐる争いについて描写するのに対して、嚴復は次のように加筆している（例13）。

例13：原文（『進化と倫理』）：Were there none of those artificial arrangements by which fools and knaves are kept at the top of society instead of sinking to their natural place at the bottom, ... (p. 41)

原文の意味：愚か者やならず者がその本来の位置である底に沈む代わりに社会の一番上に居続けることを可能にするような人為的な取り決めがなくなれば……（118頁）

訳文（『天演論』）：曰世治之最不幸，不在賢者之在下位而不能昇，而在不賢者之在上位而無由降。門第、親戚、援与、財賄、例故，与夫统治者之不明而自私，之數者皆其沮降之力也。……（導言十七・善群、1356頁）

訳文の意味：（私は）言う。世の政治の最大の不幸は、賢者が下層にいて上昇できないことではなく、不賢者が上層にいて下降しないことにある。家柄、親戚関係、相互支援の徒党、賄賂、旧例の踏襲、ないし「统治者」の愚昧や利己はすべて不賢者が底に沈むことを阻止している。……

ここで嚴復は fools and knaves（愚か者やならず者）を「不賢者」と訳し、さらに加筆して、不賢者が社会の底に沈まない原因を細かく指摘する。この加筆はまさに嚴復が長年経験した清末の腐敗政治の様態を描写しており、『勸学篇』の訳文にも、「支那皇帝」が私情にとらわれて親族を優待

---

(64) 赫胥黎(1898 [1986]) 嚴復訳、1353頁を参照。『天演論』導言十六の第一段落がすべて嚴復の加筆であり、筆者が言及した加筆はこの第一段落の中にある。また、導言十六の第二段落は原著のプロレゴメナ第 XIII 節の第二、三、四段落の訳文である。Thomas H. Huxley (1894), pp. 37-40.

する」という加筆が見られる<sup>(65)</sup>。

また、『進化と倫理』のプロレゴメナVIには、普通の人間よりはるかに優れた統治者が家屋や衣服を用意し、排水や灌漑、道路、橋、運河などの工事を実施し、機械を製造し、衛生・予防の対策を行う様子が描かれている。厳復は『天演論』の導言八でそれらの施策を翻訳したうえで、訳文に次のように加筆している。

例 14：原文（『進化と倫理』）：... hygienic precautions would check, or remove, the natural causes of disease. (p. 19)

原文の意味：……衛生学に則した予防によって病気の自然的原因が食い止められたり除去されたりする。(100頁)

訳文（『天演論』）：……致之医療薬物，所以救民之厲疾夭死也；為之刑獄禁制，所以防強弱愚智之相欺奪也；為之陸海諸軍，所以御異族強隣之相侵侮也。（導言八・烏托邦、1339頁）

訳文の意味：……（聖人は）民に医療薬物を与え、民を重病や早死から救う。民のために刑罰や監獄、政令などを設置する。それは強者、弱者、愚者、智者の間におけるいじめや奪い合いを防ぐためである。民のために陸海軍などを創設する。それは異族や強い隣国からの侵入や侮辱を防ぐためである。

厳復はこの訳文の中に刑罰・監獄・政令の設置、陸海軍の創設という施策を加筆している。1896年に厳復が弟に宛てた手紙には、官吏の腐敗を強く批判した段落が見られ<sup>(66)</sup>、他にも、彼は『原強修訂稿』（1896年10月以後）で「将は平素より学ばず、兵は平素より訓練を受けず、軍事装備は平素から用意されない」という中国の現状を語っている<sup>(67)</sup>。彼は聖人によって法律や軍隊が整備されることに期待を寄せていたに違いない。

---

(65) 斯賓塞爾 (1897年11月24日～1898年1月7日 [2013]) 厳復訳、148頁。原文：夫支那皇帝厚宗私親。Herbert Spencer (1873), pp. 19-20を参照。筆者が参照した『国聞彙編』第三冊のこの部分にはつきり読めない字が多いため、ここではその文脈の説明を省く。

(66) 厳復 (1896)、731-732頁。

(67) 厳復 (1896年10月以後)、19頁。原文：将不素学，士不素練，器不素儲。



このように、聖人は国内において、悪質な弱肉強食を法律で排除し、教育制度を整えて民種を向上させ、公平な競争をしかけて刑賞を行い、優れた人材を選ぶ。国家間における弱肉強食に対しては、聖人は軍事に力を入れる。つまり、嚴復にとって、悪質な優勝劣敗もあり、良質な優勝劣敗もあるのである。

#### 4 理想と現実の折衷案

以上考察したように、嚴復は訳書でイギリスの民種、とりわけイギリス人の自治能力および近代的な愛国心を高く評価する一方、聖人の役割を強調し、君主主導型の政治施策を主張し、聖人に対する民の忠誠心を唱えている。この一見して明らかな矛盾は、理想と現実の折衷案として理解すべきだと思われる。そして、この折衷案をもっとも明白に述べているのが時局論文『辟韓』（1895年3月）である。

この論文で嚴復は、すでに秦朝以来、君は民から国を盗んできたと述べている。しかし、中国の近い将来においては、君と臣の存在を排除するわけにはいかない。なぜなら、「その時が未だ来ず、風俗が完全でなく、民に自治能力がない」からである。当然ながら、歴代の君主のあり方は彼が理想とする聖人像とは相違している。「もし今日、中国に聖人が出現すれば、……朝晩たゆまずわが民の才、徳、力を進歩させる方法を追求し、わが民の才、徳、力を封じこめているものを除去し、相互にだましあい奪いあつて害悪をなすことをなくす」だろう。このようにして、民種水準が向上し、「さいわいに民が「自治」ができるようになれば」、聖人は「完全に自由を返し与える」のである<sup>(68)</sup>。

『辟韓』に関して、シュウォルツは、「嚴復のもっとも急進的な「民主主義的」宣言を含んでいた論文が、実は、彼の「保守主義」への前提をも同時に含んでいたのである」と分析し<sup>(69)</sup>、高田淳は、「一方にラディカルな批判があると共に、現実的変革には一転して慎重になる。この原則論と現

(68) 嚴復（1977）近藤邦康訳、432-440頁。嚴復（1895年3月13日～14日）、32-36頁。原文：其時未至，其俗未成，其民不足以自治也。……是故使今日而中国有聖人興，……乃今將早夜以孳孳求所以進吾民之才、徳、力者，去其所以困吾民之才、徳、力者，使其無相欺、相奪而相害也……幸而民至於能自治也，吾將悉復而與之矣。

(69) B. I. シュウォルツ（1978）平野健一郎訳、68頁。

実論との二重構造は、実は表裏の関係に在った」と指摘している<sup>(70)</sup>。さらに立ち入って考察してみるならば、嚴復は「軍事型社会」(militant type of society) から「産業型社会」(industrial type of society) への移行を説いたスペンサーから影響を受け、中国の二段階的發展を暗示していると考えられる。

山下は、嚴復が「社会、政治制度の性急な改革を警め、中国の救国変法の道として、民力、民智、民徳を涵養する着実な方法を主張したことがスペンサーの社会發展段階説に基づく漸進主義の主張の影響を受けた」と指摘しているが<sup>(71)</sup>、嚴復が呈示した政治モデルに関しては何も分析していない。本稿第Ⅱ章で分析したように、彼はイギリスを理想的な政治モデルとして呈示しているが、中国はまだそれを実現する段階にはないので、これは第二段階の模倣対象ということになる。それでは、第一段階において、嚴復は何か具体的な政治モデルを呈示しているのだろうか。

嚴復は『原強』(1895年3月)で、自強を実現するために、2つの課題に着手しなければならないと説いた。彼はそこで、民力、民智、民徳の向上を根本課題と認識し、それを実現するための緊急課題として、「権力を中央に集め、軍隊を訓練し、ロシアのようにすればよい」<sup>(72)</sup>と述べている。つまり、第一段階に関して嚴復が想定した政治モデルはロシアだったのである。

『原強』の約3年後に、嚴復は『中俄交誼論』(1898年1月)と題する時局論文を『国聞報』に発表した。『中俄交誼論』の前半は外交史、地理、時事などの視点から、中国とロシアが互いに親交を保つ必要性を分析し、後半はロシアを政治モデルとして模倣すべきだと論じている。村田雄二郎はこの文章が「ロシアからの圧力を避け、親ロシア的体裁をとりつくろうために書かれた」と見ている<sup>(73)</sup>。村田のこの論述に異論はないが、もしロシアと親交を保つべきことを論じることだけが嚴復の目的ならば、そもそも後半部分を書く必要は特になく、前半部分だけで十分だっただろう。し

---

(70) 高田淳 (1970)、138頁。

(71) 山下重一 (2001)、168頁を参照。

(72) 嚴復 (1895年3月4日～9日)、14頁。原文：収大権、練軍実、如俄国所為是已。

(73) 村田雄二郎 (2011)、327頁。

たがって、彼の本音はむしろ後半部にあったと思われる。嚴復はここで、民智が低い国は、君権が重く、民智が高い国は、君権が軽いと指摘している<sup>(74)</sup>。彼はさらに、中国とロシアは同じく君権が重いにもかかわらず、ロシアのほうがはるかに富強であると述べ、ピョートル1世(1672年～1725年)の功績を細部にわたって紹介した。そして、西欧の文明・技術の摂取および外交などを目的として、ピョートル1世が1697年3月から1698年8月まで、偽名を使って約250名の使節団の一員となり、ヨーロッパを訪問したというエピソードに触れ、中国の皇帝はピョートル1世のように、他国に学び、自国を発展させるべきだと主張する。類似した言説は同時期の『擬上皇帝書』(1898年1月～2月)にも見られ、中国の皇帝が数百人の臣下を率いて西洋を訪れるべきだと提言されている。しかも、嚴復が指摘した緊急課題、即ち、中央集権化および軍隊の整備はピョートル1世が行った政策そのものでもあった。つまり、ピョートル1世は嚴復にとって、まさに第一段階の政治的發展に必要な「聖人」のモデルなのである。

嚴復の政治モデルに関しては、すでに李曉東が1906年の『政治講義』を分析した上で、「嚴復は、一方では、「外患」の圧力が大きいなかで、専制はけっしてとこしえに安穩をもたらす制度ではないが、中国は、当面、同じく「外患」にさらされていたプロシアをモデルにして、フリードリヒ大王のような専制を実施すべきだという見解をほのめかした」と述べている<sup>(75)</sup>。しかし、嚴復の戊戌政変以前の時局論文や訳書などを読む限り、彼は1898年までプロシアの統治者に関心を持っていなかったことがわかる。『擬上皇帝書』で嚴復は、ロシアのピョートル1世、イギリスのヴィクトリア女王、日本の天皇と皇后に言及しているが、プロシアの君主については一言も述べていない。したがって、少なくとも戊戌政変以前に彼が考えた第一段階のモデルは、ピョートル1世が主導するロシアであったと思わ

---

(74) 嚴復(1898年1月15日～17日)、471-477頁を参照。『中俄交誼論』には署名がないが、嚴復の著作である可能性が非常に高いと『嚴復集』の編者は判断している。その理由については、王栻(1986)、437-439頁を参照。

(75) 李曉東(2005)、59頁。嚴復は、19世紀イギリスの歴史学者J.シーリーの講義をまとめた『政治学序説』を簡潔に翻訳し、自らの案語を付け加えて『政治講義』を完成した。詳細は同書44-60頁を参照のこと。

れる。

嚴復は光緒帝(1871年～1908年)を読み手に想定した『擬上皇帝書』(1898年1月～2月)で、中国をわざわざから救うことができるのはただ1人、皇帝陛下だけであると述べ、皇帝の役割を強調し、中国の改革をその手に委ねている<sup>(76)</sup>。しかし、皇帝への上書では至極当然のこの立場は、イギリスの著作の翻訳である『天演論』と『勸学篇』においても何も変わらない。換言すれば、皇帝に多大な期待を寄せる『擬上皇帝書』の主意は中国の現実を前にした嚴復の改革論の本音であり、光緒帝がピョートル1世のような偉大な統治者になることを嚴復は望んでいたのだろう。

## おわりに

原著と訳書を比較対照して分析することによって、『天演論』と『勸学篇』に嚴復の類似した政治思想とそこに潜む大きな矛盾が明らかになった。生物進化論から社会の情勢を連想する彼は、スペンサーの一元論的な社会進化論を支持し、その社会有機体説、社会進化論に魅了され、イギリスを理想的政治モデルと考えた。イギリス人の自治能力や愛国心などを羨望し、『天演論』と『勸学篇』では、イギリスのマイナス面を糊塗して、中国の読者にイギリスの理想的政治モデルをアピールしようとした。しかし、イギリス型の近代化は長い時間をかけての成果であり、中国の近代化にはそのような時間の余裕がない。このようなジレンマに陥った結果、彼はイギリスを第二段階に至ってからの模倣対象とし、第一段階における模倣対象をピョートル1世が主導するロシアに設定した。そしてこの第一段階では、封建的国家の統治者である君主に民種水準の向上を主導し、民の忠誠心を喚起する役割を担わせるべく、訳文全体で統治者の役割を強調し、聖人の出現に期待を寄せる姿勢を見せたのである。しかしながら、嚴復はこのような二段階的な主張を整理して明確に呈示することをしなかった。そのため、『天演論』と『勸学篇』には、嚴復の「矛盾」が多く見られるのである。

---

(76) 嚴復(1898年1月27日～2月4日)、71頁を参照。

啓蒙思想家及び翻訳家と呼ばれる嚴復は、多くの訳書や時局論文を公刊したが、自らの思想を整合的にまとめて理論化するような著作を残さなかった。先行研究において、根本課題や緊急課題のような嚴復の言説が注目されてきたにもかかわらず、二段階的發展という彼の核心的主張が無視されてきたのは、ここに原因があるのではないだろうか。嚴復のすべての著作を調べてみても、「ロシアをモデルとする第一段階」や「イギリスをモデルとする第二段階」のような明確な表現は見られない。それにもかかわらず、彼はスペンサーの社会發展段階説を受け入れた上で、二段階的發展を暗示したのだと思われる。

## 参考文献

### 一、日本語文献

- 宇野精一（1996）『孔子家語』新釈漢文大系、明治書院。
- 区建英（2009）『自由と国民：嚴復の模索』東京大学出版会。
- 丘浅次郎（1940）『進化論講話』東京開成館。
- 嚴復（1977）「韓愈を駁す」近藤邦康訳、西順蔵編『原典中国近代思想史』第二冊、岩波書店、432-440頁。
- 高田淳（1970）『中国の近代と儒教』紀伊國屋書店。
- 手代木有見（1987）「嚴復『天演論』におけるスペンサーとハックスリーの受容——中国近代における「天」の思想」『集刊東洋学』58、61-79頁。
- 村田雄二郎（2011）「清末の言論自由と新聞：天津『国聞報』の場合」孔祥吉、村田雄二郎著『清末中国と日本：宮廷・変法・革命』研文出版、325-356頁。
- 山下重一（2000）「嚴復訳『天演論』（1898年）の一考察（上）」『国学院法学』38(3)、151-205頁。
- 山下重一（2001）「嚴復訳『天演論』（1898年）の一考察（下）」『国学院法学』38(4)、117-169頁。
- 李曉東（2005）『近代中国の立憲構想：嚴復・楊度・梁啓超と明治啓蒙思想』法政大学出版局。
- B. I. シュウォルツ（1978）『中国の近代化と知識人：嚴復と西洋』平野健一郎訳、東京大学出版会。
- T・H・ハックスリー（1995）「進化と倫理」小林傳司訳、ジェームズ・パラディス、ジョージ・C・ウィリアムズ『進化と倫理：トマス・ハックスリーの進化

思想』小林傳司、小川真里子、吉岡英二訳、産業図書株式会社、86-183頁。

## 二、中国語文献

馮友蘭 (1982) 「從赫胥黎到嚴復」商務印書館編輯部編『論嚴復与嚴訖名著』北京：商務印書館、93-103頁。

郭道平 (2015) 「「群学」与「道統」：嚴復和張之洞的思想交鋒——從兩種『勸学篇』説起」『華南師範大學學報（社会科学版）』第6期、47-61頁。

赫胥黎 (1897年12月4日～1898年2月15日 [2013]) 「天演論」(天津『国聞彙編』刊) 嚴復訳、孔祥吉、村田雄二郎整理『国聞報：外二種』第十冊、北京：国家図書館出版社、77-85頁、211-219頁、267-276頁、333-341頁。

黄克武 (2013) 「晚清社会学的翻譯——以嚴復與章炳麟的訳作為例」孫江、劉建輝主編『亞洲概念史研究，第一輯』北京：生活・読書・新知三聯書店、3-46頁。

黄克武 (2014) 「何謂天演？嚴復「天演之学」的内涵與意義」『中央研究院近代史研究所集刊』第85期、129-186頁。

賈誼 (2003) 『賈誼新書訳注』于智榮訳注、ハルビン：黒龍江人民出版社。

斯賓塞爾 (1897年11月24日～1898年1月7日 [2013]) 「斯賓塞爾勸学篇」(天津『国聞彙編』刊) 嚴復訳、孔祥吉、村田雄二郎整理『国聞報：外二種』第十冊、北京：国家図書館出版社、11-23頁、139-148頁、205-209頁。

孫運祥 (2003) 『嚴復年譜』福州：福建人民出版社。

王栻 (1986) 「嚴復在『国聞報』上發表了哪些論文」嚴復著、王栻主編『嚴復集』第二冊、北京：中華書局、421-452頁。

王中江 (2010) 『進化主義在中国的興起：一個新的全能式世界觀』增補版、北京：中国人民大学出版社。

嚴復 (1998) 『天演論』馮君豪注訳、鄭州：中州古籍出版社。

姚純安 (2006) 『社会学在近代中国的進程：1895～1919』北京：生活・読書・新知三聯書店。

下記の嚴復の時局論文・手紙・翻譯は、すべて『嚴復集』に収録されている。

嚴復著、王栻主編 (1986) 『嚴復集』北京：中華書局。

赫胥黎 (1898 [1986]) 「天演論」嚴復訳、『嚴復集』第五冊、1317-1398頁。

嚴復 (1895年3月4日～9日) 「原強」『嚴復集』第一冊、5-15頁。

嚴復 (1895年3月13日～14日) 「辟韓」『嚴復集』第一冊、32-36頁。

- 嚴復（1895年5月1日～8日）「救亡決論」『嚴復集』第一冊、40-54頁。
- 嚴復（1896年10月以後）「原強修訂稿」『嚴復集』第一冊、15-32頁。
- 嚴復（1896）「与四弟觀瀾書（五封）」四、『嚴復集』第三冊、731-732頁。
- 嚴復（1897）「与五弟書」『嚴復集』第三冊、733頁。
- 嚴復（1897年11月24日）「駁英『太晤士報』論德拋膠澳事」『嚴復集』第一冊、55-57頁。
- 嚴復（1898年1月15日～17日）「中俄交誼論」『嚴復集』第二冊、471-477頁。
- 嚴復（1898年1月27日～2月4日）「擬上皇帝書」『嚴復集』第一冊、61-77頁。
- 嚴復（1898年6月3日～4日）「有如三保」『嚴復集』第一冊、79-83頁。
- 嚴復（1898年6月7日～8日）「保教余義」『嚴復集』第一冊、83-85頁。

### 三、英語文献

- Herbert Spencer (1873) *The Study of Sociology*, London: Henry S. King & Co.
- James Reeve Pusey (1983) *China and Charles Darwin*, Cambridge (Massachusetts) and London: Council on East Asian Studies, Harvard University.
- Thomas H. Huxley (1894) *Evolution & Ethics and Other Essays*, London: Macmillan.

中文摘要

# 从《天演论》和《斯宾塞尔劝学篇》的关联考察 严复的政治思想

——两个阶段的发展观以及各阶段的政治模型

宋 晓煜

1897年末至1898年初,严复在旬刊《国闻汇编》上几乎同时连载了两部译文。即,以斯宾塞(Herbert Spencer)《社会学研究》(*The Study of Sociology*, 1873年)为底本的《斯宾塞尔劝学篇》,和以赫胥黎(Thomas Henry Huxley)《进化与伦理》(*Evolution and Ethics*, 1894年)为底本的《天演论》。

关于《斯宾塞尔劝学篇》(以下简称《劝学篇》)的先行研究极为稀少;而《天演论》在学界备受瞩目。尽管如此,以往的研究者多将目光集中于《天演论》的案语部分,未能从《天演论》的译文细节中充分提取严复自身的政治思想。并且,迄今为止尚未见到把《天演论》和《劝学篇》放在一起比较分析的先行研究。

本文首先揭示了《天演论》和《劝学篇》的关联,证实了比较研究两部译文的合理性。然后重点分析严复在译文中的增删以及他对译语的选择等行为,找出《天演论》和《劝学篇》在翻译过程中的共通点。在分析这些共通点时参考严复的时局论文、相关先行研究等进行论证,以达到读取严复政治思想的目的。

通过对照英文原著和中文译文,笔者发现《天演论》和《劝学篇》都潜藏着严复政治思想的巨大矛盾。具体而言,严复为斯宾塞的社会有机体论、社会进化论所倾倒,将英国的政治模式视为理想的模仿对象。他羡慕英国人的自治能力和爱国心,为了更好地向中国读者宣传英国模式,在译文中尽量避免触及英国的阴暗面。然而现实问题在于,英国的近代化是经过漫长岁月而实现的,中国则没有那么充裕的时间。笔者认为,在面对这一困境时,严复把英国作为第二阶段的模仿对象,把彼得一世治理下的俄国作为第一阶段的模仿对象。并且在第一阶段,严复希望由皇帝主导政治改革,要求皇帝致



『天演論』と『勸学篇』の関連性から見た嚴復の政治思想

力于提高人民的素质并唤起人民对皇帝的忠诚之心。因此，从两部译文都能看出严复在热切渴望“圣人”的出现，努力强调统治者的作用。